様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月 １５ 日現在

機関番号：３５４０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０３０２６

研究課題名（和文）三重県答志島における青年流出に伴う文化の維持と変容に関する文化心理学的研究

研究課題名（英文）A cultural psychological study on the cultural maintenance and transformation associated with the outflow of young people in Toshijima, Mie Prefecture

研究代表者
澤田　英三（Sawada, Hidemi）

安田女子大学・心理学部・教授

研究者番号：００２１５９１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：三重県答志島は、かつては青年団が地域の伝統的な行事を活発に展開していたが、近年では青年の流出が著しく、伝統的な祭りなども従来の形では実施が困難になってきた。
たとえば，20年の一度開催されるお木曳祭では，祭りの主役となる青年が少なくなり，祭りを開催するためには，祭りの主役の年齢幅を広げるとともに，20年前の経験者だけでなく，40年前の経験者も積極的に協力して祭りの指導に当たることが必要になっていた。
また，地域の他の行事や日常生活においても，青年団の役割を他の年長者が分担しながら周辺から盛り上げるなど，地域の日常や伝統行事を微修正しながら維持することに取り組んでいた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、文化の継承を単なる過去の文化のコピーではないと考えている。マクロな観点から見れば文化は同形の複写に見えようとも、ミクロな視点から見ればその時代を生きる者たちがその都度文化を生成しているのである。つまり，文化の継承とは、過去から受け継がれた文化の「かたち」の中で、新たな状況に対応するために，葛藤しつつも自分たちのかたちに作り直して後世へと伝えていく歴史的な営みなのである。本研究は，文化の継承と変容を、①微視発生を通して次世代につなぐ縦のプロセスと、②同時代を生きる者同士でなされる議論・合意形成・納得という横のプロセスという二重の過程から解明しようと試みた点にある。

研究成果の概要（英文）：In Toshijima, Mie Prefecture, the Youth Group used to be active in local traditional events, but in recent years, there has been a significant outflow of young people, and it has become difficult to hold traditional festivals in the traditional way.
For example, in the Okihiki Festival, which is held once every 20 years, there are fewer young people to take on the main role, so in order to hold the festival, it was necessary to expand the age range of the festival's main participants and to actively cooperate and lead the festival not only with those with experience from 20 years ago, but also with those with experience from 40 years ago.
In other local events and daily life, other older people shared the role of the Youth Group and livened up the festival from the surrounding areas, and they worked to maintain the daily life and traditional events of the region by making small adjustments.

研究分野：社会心理学

キーワード：答志島　青年　文化心理学　伝統伝承

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 三重県鳥羽市答志島の御多羅志神社では、伊勢神宮と同様の式年遷宮（20 年に一度本殿が建て替えられる遷宮）において、その主柱となるご神木を神社まで運ぶ「御木曳祭」が行われる。この御木曳祭は、地元・答志地区の青年団の青年が、地元で古くから伝わる伊勢音頭の音頭取りの指揮のもと、ご神木を載せた車を引いて回り、最後に神社に奉納する 20 年に一度の伝統的な祭りである。とりわけ祭りの主役を務める音頭取り（20 歳代）の養成に携わるのは、20 年前に音頭取りを務めた師匠（40 歳代）や 40 年前に音頭取りを務めた顧問（60 歳代）といった経験者に限られており、地区内 3 世古（東・中・西）に分かれて数か月前から連夜のごとく練習が繰り返され、練習の合間に祭の様子や音頭取りの役割、その意味などが口承されてきた。しかし，ここ 20 年は答志地区の人口は減少の一途をたどり、とりわけ青年の著しい島外流出によって、20 歳代の青年はわずか 10 名ほどしか残っておらず、2018 年の御木曳祭開催は危機的状況にあるという。この状況を危惧した元音頭取りの師匠・顧問たちは、何百年もの伝統ある御木曳祭を自分たちの代で終わらせないために、前回までの音頭取り選出基準や練習のあり方などに修正を加える議論を始めたという。20 年ぶりの伝統行事を存続させるために、時代や島の置かれた状況を受け入れて修正を加えつつ、新たな文化を創造して継承していくプロセスが始まろうとしていた。

(2) この 20 年ぶりに開催される御木曳祭によって顕現化した青年の島外への流出は、答志島における遅れてきた過疎化現象である。戦後の答志島の人口は 2500 人前後で推移し、昭和の高度成長期を経た後も 1990 年代までは大幅な人口流出は認められなかった。漁港や漁協では青年たちの溌剌とした声が響き渡り、海岸や路地ですれ違う地域の子どもや大人たちと当たり前のように会話がなされる。多くの年中行事や冬の夜警では青年団が重要な役割を担い、週末に集まる寝屋子では夜遅くまで若者たちの会話や笑い声が聞こえてくる。それが答志地区の日常であった。しかしこの 20 年で多くの青年が島を離れて、答志地区の日常や年中行事、そして青年が担ってきた役割は、島に残った者たちでどのように受け継ぎ、どのように省力化されてきたのだろうか。

２．研究の目的

以上のような状況・背景を踏まえ，本研究では次のような３つの研究目的を設定した。

目的１「2018 年の御木曳祭と 2020 年の遷宮祭の動画アーカイブの作成」 2018 年 6 月に開催された御木曳祭と, 2020 年 11 月に開催された遷宮祭の様子を動画として撮影し, 答志島の方々が利用できるアーカイブを作成することが第一の目的である。

目的２「20 年に 1 度開催される御木曳祭の音頭取り養成にみられる祭りの継承と変容」 20 年ぶりに開催される御木曳祭という伝統行事を, 地元の青年が少ない中で開催して次の 20 年後にも残していくために，祭りの主役・音頭取り養成の過程の中で，師匠・顧問と青年がどのようなやりとりを通して祭りの意味づけ，互いが納得していくのかといった伝統行事の継承と変容の微視発生的プロセスを明らかにする。

目的３「青年の島外流出に伴うコミュニティ内の役割の変容と住民の納得の様式」　御木曳祭の開催にとどまらず，多くの青年が島外に流出したことによって，これまで青年が果たしてきた地区内の役割が大きく変化したことが予想される。その役割を他の成人集団である消防団や漁業組合，老人会，各世古（町内会）などがどのように分担・削減しながら，コミュニティの日常や伝統行事が維持・変容してきているのかを明らかにする。

倫理的配慮　本研究は，安田女子大学倫理審査委員会で承認を受けた（番号：180002）。

３．研究の方法と研究成果

(1) 2018 年の御木曳祭と 2020 年の遷宮祭の動画アーカイブの作成（目的１）

①動画撮影期間　御木曳祭が，2018 年 3 月 21～22 日における音頭取りの練習風景と，2018 年 6 月 2～4 日における御木曳祭前日の練習風景および当日の様子と片づけであり，遷宮祭が，2020 年 11 月 7～9 日における遷宮祭の様子とその前後であった。

②撮影場所　練習風景は練習場所となっている師匠の家や借りている公共の集会所などであり，祭り風景はお木車が通る前の浜から御多羅志神社までの道中と神社内であった。

③結果　筆者が撮影した動画は，今回は YouTube へアップすることによって地元の人たち他と共有することになった。当時の YouTube への動画アップのデータ容量に制限があったため，撮影した動画を取捨選択した上で，2018 年の御木曳祭は 19 本，計 3 時間 40 分 50 秒分の動画をアップした。その 2 年後の遷宮祭の動画は，データ容量の制限が軽くなったため，2 本で計 57 分 49 秒の動画をアップした。なお，地元の人たちには動画へのアクセスの方法を共有した上で動画を共有した。

(2) 20 年に 1 度開催される御木曳祭の音頭取り養成にみられる祭りの継承と変容(目的２)

①調査対象　答志町答志地区にある３つの町内会（世古：東・中・西）で行われる音頭取りの任に当たる青年と，師匠・顧問（20 年・40 年前の音頭取り経験者）および地域の人々。

②調査月日　2018 年 3 月 20～22 日，5 月 31 日～6 月 5 日（6 月 3 日が 祭り当日）。

③手続き　祭の準備から祭当日，振り返りの会へ参加し，観察とインタビューを実施した。

④結果と考察　1) **準備・練習**　練習は 2 月中旬から公共施設で始まった（ほぼ毎晩）。20 年前までは，20 年前の音頭取り（現在，師匠）のうちのどこかの自宅で行われてきた。1998 年は，音頭取りの練習はダメ出しが多く厳しかった。40 代の師匠がメインで指導したが，2018 年は，20 年前の師匠が顧問という立場でメインで指導しており，その指導の仕方も丸くなった。20 年前の音頭取りは 2 人が島外居住のため，サブとして指導する立場であった。しかし，指導の仕方や指導者は世古によって異なっており，中世古では 40 代の師匠がメインで指導していた。2018 年の音頭取りは，青年が 2 名と 30 代が 2 名となり，20 年前の助人は青年 1 組 2 名であったが，2018 年は小学生が 2 組 4 人で担当していた。

音頭取り選考においては，単に青年というその時の年齢だけで決めていたわけではなく，

漁業者に腰を据えて従事しているなど, 20 年後も島内居住している可能性が高いことが重視され，そのために年齢としては青年期を越えた 30 代の音頭取りを選考することになったという。また，これまで青年（団）が担っていたさまざまな役割については，助人を小学生に任せたり，30 代以降の住民が担うなど，青年の前後の年代が補っていた。

2) **御木曳祭当日**　島外に住んでいる青年や師匠なども祭り当日には帰省し, 裏方を手伝ったり綱を引いたり, 音頭に応答したりしていた（表１）。島を離れたとしても答志島にとって大切な祭りという認識があり，青年の時代に花形としての役割を担っていたという自負から，当日だけでもかかわりたいという責任感のあらわれだと思われる。

表 1　御木曳祭当日（6/3）の主なスケジュール

時刻	祭りの進行と準備，片づけ，打ち上げの内容
3:30 頃	音頭取りや助人，梃子持ちが，世古ごとに水垢離で海に入る
5:30 頃	浜では，御神木をお木車に載せる（写真 3-1）
7:00 頃	各世古の宿にて乾杯，宿を出発。他の青年が伊勢音頭で送る
8:00 頃	各世古が集まった浜にて，出発の神事
9:00 頃	各世古の朝の音頭取り 2 人ずつがお木車に乗り込んで前の浜を出発
13:15 頃	途中の舞台に到着。お昼休憩へ
14:30 頃	各世古の午後の音頭取りがお木車に乗り込んで美多羅志神社へ
17:15 頃	美多羅志神社に到着。伊勢音頭とともに青年たちが御神木を奉納
17:50 頃	すべての神事が終わり，伊勢音頭を歌いながら各世古の宿に帰る
20:00 頃	各世古ごとに打ち上げ

(3) 青年の島外流出とそれに伴う地域内役割の再配置と納得の様式（目的３）

①調査対象　答志町答志地区に住む住民（青年，成人，壮年，高齢者)。

②手続き　対象者宅を訪問し, 青年後援会の設立経緯や, 寝屋子制度がもたらす人間関係, 地域内で住民が担う役割とその年代などをインタビューした。

③結果と考察　これまで答志地区の町内会には,「老人後援会」という高齢者を支援する会があった。金銭的支援（年間 10 万円）とともに，老人会の行事等を支援する人が各世古（東・中・西）から 40～50 代の 15 人ずつ出て計 45 名ほどがいた。しかし，青年等の島外への転職・移住などによって高齢化率が進行し（36.8%：2019 年 3 月末現在)，数年前より地域内の様々な行事を支えている青年が減少して島に残っている青年への負担が過重になってきている現状を憂いて，元気な老人の後援より「青年後援会」が必要だという声があがり，2018 年に老人会の会長・副会長が主体となって,「減少する有職青年団員を支えてほしい」と町内会に申し入れ，2019 年から「青年後援会」が発足した。

後援内容は，金銭的支援を行うのではなく，毎年 2 月に 3 日間かけて行われる神祭（じんさい：青年団が中心的役割と運営を担っていた）において，七人遣い（7 人）と御的衆（6 人）はこれまで通り青年が担うが，その他の役割については，各世古（東・中・西）か

ら元青年が手伝いに入る形となった。また，町内会として「青年後援会」を作ったことが，島に残る有職青年たちの負担を軽減しただけでなく，元青年が青年と同じ役割を担いながら一緒に働く機会を持つことができ，それが新たな交流へと発展するきっかけとなった。

(4) 青年の島外流出に対する 30 代の成人と 60 歳以降の年長者の納得の様式（目的３）

①調査対象者　答志地区に在住する 30 歳代の漁業者 2 名と，60 歳代以上の漁業者等 3 名。

②手続き　漁業に従事していた青年の島外流出の現状について，地域内役割の変更をどのようにとらえており，島に残って漁業に従事している青年や若い世代に対して自身がどのようにかかわっているのかを，半構造化面接によって調査した。

③結果と考察

30 歳代と 60 歳代以上の漁業者に共通して語られることが多くあった。これは，日常の中で漁の話や最近の地域の様子，行事の在り方などが世代を超えて話されていて，いわばこの地域で共通の言説になっているのだと思われる。しかし，同じような言説は話されるが，それぞれの立場が異なり，30 歳代の場合は，自分の同学年の仲間たちが島外に就職を求めたことなどを背景にして話しているのに対して，年長の漁業者は，自分の子ども世代・孫世代を念頭において話すという点で異なっていた。

青年への接し方の相違点については，青年との年代の近さがかかわり方に違いに出ていた。年長者の場合は，青年後援会などを通して青年の手伝いをする際に意見をすることはあっても，日常的には気づいても直接話すことはない。それに対して，30 歳代の場合は，我が子と散歩をするという自然な活動をしながら青年たちの様子を見るようにしており，気づいたときにはちょっと先輩の立場から声をかける関わりをしていた。これは，青年に対する振る舞い方を世代間で暗黙にすみ分けて役割分担をしているのかもしれない。

＜引用・参考文献＞

Lave, J., & Wenger, E. (1991) Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation. Cambridge: Cambridge University Press. レイブ, J.・ウエンガー, E.　佐伯　胖（訳）（1993）　状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加．産業図書.

Rogoff, B．(2003)　The Culture Nature of Human Development. Oxford University Press, USA.　ロゴフ，B.（著）當眞千賀子（訳）（2006）文化的営みとしての発達：個人，世代，コミュニティ．　新曜社.

澤田英三　（2010）　三重県答志島の寝屋子制度における二次的親子関係と青年期発達の特徴．科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書.

Valsiner, J.（2007）Culture in Minds and Societies：Foundations of Cultural Psychology. California：SAGE Publications. ヴァルシナー , J.（著）　サトウタツヤ（監訳）（2013）新しい文化心理学の構築：〈心と社会〉の中の文化．新曜社.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 澤田英三
２．発表標題 三重県答志島における青年の島外流出とそれに伴う地域内役割の変容と納得の様式(2)
３．学会等名 日本質的心理学会第19回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 澤田英三
２．発表標題 三重県答志島における青年の島外流出とそれに伴う地域内役割の変容と納得の様式(3)
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 澤田英三
２．発表標題 三重県答志島における青年の島外流出とそれに伴う地域内役割の変容と納得の様式
３．学会等名 日本質的心理学会第15回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 澤田英三
２．発表標題 三重県答志島の御木曳祭（式年遷宮）にみられる青年への伝統の継承に関する文化心理学的研究（1）
３．学会等名 日本質的心理学会第14回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関